

trivia ■ 皮膚科のトリビア ■ 138

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで聞きししたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

抗セントロメア抗体と 原発性胆汁性肝硬変の関連

神奈川県皮膚科医会第150回例会から（平成28年3月6日）

原発性胆汁性肝硬変（PBC）は他の自己免疫疾患との合併が多い。中でも皮膚限局型強皮症との合併が最多で、PBCの3～50%とされている。また、PBC患者の9～30%で抗セントロメア抗体が陽性となる。反対に強皮症の25%で抗ミトコンドリア抗体が陽性となり、この2つの疾患の関連性が示唆される。PBCの診断に際しては抗ミトコンドリアM2抗体が感度、特異度ともに高いが、強皮症と合併する例では特異抗体を認めないものも多い。皮膚限局型強皮症で抗セントロメア抗体陽性、ALP上昇を認める場合はM2抗体が陰性であってもPBCの可能性が高いと判断すべきである。また、セントロメア抗体陽性例では門脈圧亢進症に進行しやすいと言われている。
「抗セントロメア抗体陽性の強皮症は数例診ているが、ALPはさほど重要視していなかったんで、勉強になった」。

陰部外下疳という用語

第275回日本皮膚科学会東海地方会から（平成28年3月20日）

下口唇から頬粘膜に至る潰瘍を主訴に来院した50歳代男性患者で、血清学的に梅毒と診断した。硬性下疳は、男性では冠状溝、

包皮、亀頭部、女性では大小陰唇、子宮頸部が好発部位だが、口唇や手指などに発生することもあり、陰部外下疳と呼ばれている。頻度2～3%でまれであるが、臨床形態、病理組織像は典型的である。

「古典に触れたような感じの病名である。このところ1期の梅毒を診ることが増えたが、これまでのキャリアでも陰部外下疳は診たことがなかったので参考になった」。

第3の小麦アレルギー

第275回日本皮膚科学会東海地方会から（平成28年3月20日）

小麦による即時型アレルギーには、 ω 5グリアジンによる運動誘発性のもの、「茶のしずく」石鹼中のグルパール19Sによるものが知られてきたが、イネ科の花粉との交叉感作が原因の小麦アレルギーがありそうだ。イネ科花粉による鼻炎のある患者で、運動誘発性だが眼瞼に浮腫が生じた。抗原の解析からはこれまでとは違う可溶性分画中の蛋白が原因と考えられる。

「果物や豆乳と同じ、いわゆるpollen-food syndromeだが、これまでは報告されていないようだ。うどんやパンをこねる人には小麦の経皮感作も起こりそうだし、それが、イネ科花粉症の原因になりそうで、複雑である」。

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス：

<http://www.asai-hifuka.com>

ベピオゲルの作用機序と使い方

某製薬会社発売記念講演会から (平成28年3月27日)

ベピオゲルは2.5%過酸化ベンゾイル (BPO) を主成分とし、組織中に活性酸素を動員して爆弾のように細菌を死滅させるため、耐性菌の出現がないことが特徴である。一方、角層に対しては活性酸素の作用によって角層の剥離が促進する。アダパレンはレチノイド様作用で表皮角化細胞の分化を抑制するので、両者は作用点が異なっている。

「配合薬を含めていろいろなニキビ治療薬があるので、それぞれの薬理作用を知って適応を選ぶのがよいと思う。炎症性ニキビの初期治療としては、面皰が目立つときはアダパレン＋抗菌薬、炎症が強いときはBPO＋抗菌薬がよさそうである。BPOは接触皮膚炎の副反応もあるので、最初は狭い範囲からのお試しがよさそうである」。

女性のAGAの分類

m3.com WEB講演会から (平成28年3月31日)

女性のAGA (Female AGA : FAGA) はルードウィッグ型、クリスマスツリー型、ハミルトン型と3つのパターンに分類されている。ルードウィッグ型は頭頂部から後頭部の範囲がびまん性に薄くなっていくタイプ、

クリスマスツリー型は生え際から頭頂部の真ん中が左右に拡がりながら薄くなっていくタイプ、ハミルトン型は、男性AGAと同様、生え際に剃りこみが入るタイプである。「知らなかったが、分類によって治療が変わるわけではなさそうだ。育毛サロンのホームページが詳細に記述しているのには驚いた」。

粉瘤のステロイド 嚢腫内注入療法

横浜市皮膚科医会第143回例会から (平成28年4月2日)

粉瘤に炎症を伴って切開を要する状況になることはまれではないが、細菌培養を行っても半数では陰性となる。炎症はあるが、細菌感染ではなく、その原因は漏出した角質に対する異物反応と解釈した。皮下注用のステロイドを嚢腫内に注入しておく、炎症が消褪し、嚢腫自体も縮小ないし消失することがあるので、臨牀的に有用な方法と考える。

「いかにも膿と思われても細菌培養で陰性であることは経験がある。細菌感染が少しでもある場合にはステロイド局注は気持ちが悪いが、確かに縮小している例もあるので、試してみたいと思った。嚢腫や嚢腫内の血腫が目立つようなニキビや膿皮症にも使えそうである」。